

# 『一人の笑顔のために』

## 平和について考える

今年、終戦から76年になります。夏休みには、テレビでも「平和」について考える番組がよく放映されます。過去の戦争によって、多くの人々の命が奪われました。軍人ばかりでなく、子どもやお年寄りなど民間人も数多く殺されました。人としての幸福や生きる権利を無理矢理奪われたのです。まさしく「戦争以上の人権侵害はない」のです。過去の過ちを二度と繰り返さぬために、夏休みを「平和」について考える機会としてほしいと考えています。

広島に原爆が投下された三日後の昭和20（1945）年8月9日午前11時02分、長崎では地上500メートルの上空で原子爆弾が炸裂し、一瞬にして七万人あまりの尊い命が失われました。

長崎の平和公園の少し北に故永井隆博士の住まいであった「如己堂」があります。「己の如く人を愛せよ」という言葉にもとづいて博士が建てられた家です。永井博士は、当時長崎医科大学の助教授でしたが、被爆により自ら白血病となり、余命3年と診断されながらも傷病者の治療活動を続け、その間に、「原爆報告書」をまとめ、映画化されましたが、「長崎の鐘」を執筆し、その他、数多くの著書を著し、被爆した人々の苦悩を貴重な証言として書き残されました。

次は永井博士の著書のひとつである「この子を残して」の一節です。



うとうとしていたら、いつの間に遊びから帰ってきたのか、カヤノが冷たいほほを私のほほにくっつけ、しばらくしてから、

「ああ、……お父さんのにおい……」  
と言った。

この子を残して…この世をやがて私は去らねばならぬのか！

母のにおいを忘れたゆえ、せめて父のにおいなりとも、と恋しがり、私の眠りを見定めてこっそり近寄るおさな心のいじらしさ。戦の火に母を奪われ、父の命はようやくとりとめたものの、それさえ間もなく失わねばならぬ運命をこの子は知っているのであろうか？

枯れ木すら倒るるまでは、その幹のうつろに小鳥をやどらせ、雨風をしのがせるという。重くなりゆく病の床に全くの廃人となり果てて寝たきりの私であっても、まだ息だけでも通っておれば、この幼子にとっては、依るべき大木のかげと頼まれているのであろう。けれども、私の身体がとうとうこの世から消えた日、この子は墓から帰ってきて、この部屋のどこに座り、だれに向かって、何を訴えるであろうか？

私の布団を押し入からひきずり出し、まだ残っている父のにおいの中に顔をうずめ、まだ生え変わらぬ奥歯をかみしめ、泣きじゃくりながら、いつしか父と母とともに遊ぶ夢のわが家に帰りゆくであろうか？

夕日のかつと射し込んでだだっ広くなったその日のこの部屋のひっそりとした有様が目に見えるようだ。私のおらなくなった日を思えば、なかなか死にきれないという気にもなる。せめてこの子がモンペつりのボタンをひとりではめることのできるようになるまで…なりとも…。

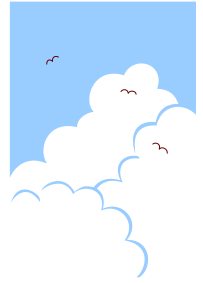
このような悲しみを繰り返さないためにも、平和の尊さ、大切さを心に刻み、平和な世界を築く努力をしていかなければと思います。

【参考文献】人権教育講話集 上山 勝 著（学事出版）

裏面の詩「ヒロシマの空」もお読み下さい。

# ヒロシマの空

林 幸子



夜 野宿して やっと避難さきにたどりついたら お父ちゃんだけしかいなかった  
…お母ちゃんとユウちゃんが死んだよお…  
八月の太陽は 前を流れる八幡河に反射して 父とわたしの泣く声をさえぎった  
そのあくる日  
父はからの菓子箱をさげ わたしは鍬をかついで ヒロシマの焼け跡へ とぼとぼある  
いていった  
やっとたどりついたヒロシマは 死人を焼く匂いにみちていた  
それは サンマを焼くにおい  
燃えさしの鉄橋を よたよた渡るお父ちゃんとわたし  
昨日よりもたくさんの死骸 真夏の熱気にさらされ 体がぼうちょうして はみだす内臓 渦巻く腸  
かすかな音をたてながら どすぐろい きいろい汁が 鼻から口から耳から目から とけて流れる  
ああ あそこに土蔵の石垣がみえる なつかしい わたしの家の跡 井戸の中に 燃えかけの包丁が浮いて  
いた  
台所のあとに お釜がころがり 六日の朝たべた カボチャの代用食がこげついていた  
茶碗のかけらがちらばっている  
瓦の中へ鍬をうちこむとはねかえる お父ちゃんは瓦のうえにしゃがむと 手でそれをのけはじめた  
ぐったりとしたお父ちゃんは かぼそい声で指さした  
わたしは鍬をなげすてて そこを掘る 陽にさらされて 熱くなった瓦 だまって 一心に掘りかえす父と  
わたし  
ああ お母ちゃんの骨だ  
ああ ぎゅっとにぎりしめると 白い粉が 風に舞う お母ちゃんの骨は口に入れると さみしい味がする  
たえがたいかなしみが のこされた父とわたしに襲いかかって  
大きな声をあげながら ふたりは骨をひらう  
菓子箱に入れた骨は かさかさとお音をたてる  
弟は お母ちゃんのすぐそばで 半分骨になり 内臓が燃えきらないで ころりところがついていた  
その内臓にフトンの綿がこびりついていた …死んでしまいたい！  
お父ちゃんは叫びながら 弟の内臓をだいて泣く  
焼け跡には鉄管がつきあげ 噴水のようにふきあげる水が  
あの時のこされた唯一の生命のように 太陽の光をあびる  
わたしはひびの入った湯呑み茶わんに水をくむと 弟の内臓の前においた 父は配給のキャンパンをだした  
わたしはじっと目をつむる お父ちゃんは生き埋めにされたふたりの声を聞きながら どうしようもなかった  
のだ  
それからしばらくして 無傷だったお父ちゃんの体に斑点がひろがってきた 生きる希望もないお父ちゃん  
それでも のこされるわたしがかわいそうだと ほしくもない食べ物を喉にとおす  
…ブドウが食べたいなあ キウリでがまんしてね それは九月一日の朝 わたしはキウリをしぼりお砂糖を  
入れて ジュースをつくった お父ちゃんは 生きかえたようだ と わたしを見てわらったけど 泣いて  
いるようなよわよわしい声 ふとお父ちゃんは虚空を見つめ …風がひどい嵐がくる…嵐がといった  
ふーっと大きく息をついた そのままがっくりとくずれて うごかなくなった  
ひと月もたたぬまに わたしはひとりぼっちになってしまった  
涙を流しきったあとの焦点のない わたしのからだ  
前を流れる河を みつめる  
美しく晴れわたった  
ヒロシマの あおい空

